
私と霧夜と転生世界

霧咲風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と霧夜と転生世界

【Nコード】

N3221P

【作者名】

霧咲凧

【あらすじ】

転生無双物です。チートです。たぶんほぼ負け無しです。基本才子リジナル(?)ですが、ある作品の物が出てきたりもあります。恐らくコメディーだとは思いますが苦手な方はご注意ください。(作者注)プロローグは割りと暗いですが、基本明るめです。理由は作者が暗い話をそんなに書けないからです(更新は一週間に一度の予定です)。

プロローグ

私はいじめにあって生きてきた。

いや、いきなり何言っただよ。とか思う人もいるかもしれないが、それは紛れも無い事実である。

親から、学校の連中からなどの人々からいじめを受けてきていた。

そんな私の唯一の救いといえば、そんな私を匿ってくれる仲の良い友人がいたことだろう。

彼女は綺麗な紺色の髪に黒い目でスタイルも良く人望もあるという、そんな私にはどう考えても不釣り合いだった。

以前本人に尋ねてみたところ『一人暮らしてから話し相手が欲しい』と返されたが、それにしただっていじめを受けている者と付き合うのはおかしいと表現できるだろう。

友人に『その綺麗な赤い髪とか綺麗な黒い目とか綺麗な顔とかが好き』等とも言われてきて、一度町へ出てどれほど可愛いかを自覚した方が良く。と言われて町に行く計画を立てられた。

そして、その友人と初めて町へと出かけることになった日に、私たちの乗っていたタクシーが派手に事故にあって私と友人は病院に担ぎ込まれた。

結果として、私が助かり、友人は亡くなった。どうやら神様と言うのは酷くいい加減らしい。人望のある彼女を殺しておいて、いじめを受けるような私が生き残るのだから。

だが、それでも私は神様へと祈りをささげた。私はどうなっても良から彼女を生き返らせてください、と。

その祈りも通じず、結局その事故の後遺症で私も数カ月後には死ぬ事となった。すぐに諦めなかったのは、まだ私に彼女の分まで生きよう。と言う考えがあったからだろう。

それでも、彼女が生き返るのならば何だってやる。と言う位の覚悟が私にはあった。だと言うのに、

「あ、やっと来たね。どうもどうも神様です。ちょっと手違いで君の友達を殺しちゃったんだけどね、その友達が『そんなテンプレはあの子が死んだ時にあの子に与えてください』って言うもんだから待ってたのよ」

死んで気がつく、身に覚えのない世界で神と名乗る女性がそう言っている。そしてその神と言う人が言う言葉で、あの友人は死んでまで私を心配している。と言うのが少し切なかった。

この神様とか言ってる人が嘘を言ってる感じもしないので、恐らくこの人は神様なのだろう。だから、異世界に転生させる（確か友人から聞いた話ではこれをテンプレと言うのだったと思う）と言うのも本心からの言葉なのだろう。

「それでね、思い浮かべた能力（または物）を作るって言う能力をつけてくれて言われたのよ。無制限でね。『それさえあればあの子も苦労しないでしょう』って笑って言ってね」

「だったら私にどうしろって言うんですか？どの世界に行こうと、私はこれ以上生きていく気はありません」

少しイライラして棘のある言い方になる。対して神様はそれに微笑んで、

「『とでも言うでしょうから今から言う言葉を言ってください』さっきの言葉の後に彼女が言ってた言葉ね。彼女はその後にごう伝えるように言ってたわ『わざわざもう一度生きる権利を譲ったんだから四の五の言わずに生きなさい。じゃなきゃ絶対に許さないわよ』って」

聞けば聞くほど、友人がしているのは自分の心配でなく私の心配だと分かってくる。そしてそれにだんだんイライラしてくる。

「さて、送りたい世界の希望はある？それと、名前もね。今の名前でもいいわよ？別に」

「世界の希望は特にありません。名前は――」

そこまで言って友人の顔を思い浮かべる。彼女の名前と――

「霧夜桜。キリヤサクラでいいわ。それに、打算的な考えで私を送る世界を送ってもいいから、私の願いを聞いてくれますか？」

「霧夜桜、か。本当にいいの？」

「良いんです。友人と同じ名前ですし」

「なら名前も『打算的』に送る世界も決まったからお願いを聞いておきましょうか」

「それは、――と――なんですけど、できますか？」

「それぐらいなら良いわよ。それに、私も元から酷いことをする気はなかったし、言うほど貴女に不幸になる世界じゃないから安心していいわよ?」

「それでもやっぱりこの方が良いんです。だって――」

私に桜が憑いていてくれれば百人力だから。

プロローグ（後書き）

初っ端から暗い……あ、どうも。始めましての方も向こうの読者さんもこんにちは。

主人公さんのテンションは基本高いような中間のような感じですので、プロローグでのテンションは友人を亡くしたショックでそういう感じになってしまった。と言うことを一応補足して置きます。

さて、この話は、魔族が織り成す世界へとチート能力者が転生して無双する話です。そんな話が嫌いな方はご注意ください。

この主人公は友人の影響で二次元にも割と詳しいです。ですから様々な二次的能力を使いまくるでしょう。

これはまあ、作者の自己満足的な感じもあるかも知れませんが、一応楽しんでいただければ幸いです。

では、次回の『私と霧夜と転生世界』も宜しくお願いします。

第一話 出会いと再開とお姫様

「ちょっと！アンタがこっちの道で良いって言ったんでしょ！？」

「しょうがないじゃない！それに目的地も分からないのにどこを目指せばいいのよ！」

私たちは『一つの体』で言い合いながら道を歩く。一つの体で、と言うのも、私が神に、

『霧夜の魂を私の中に入れる、と使いたい能力をレベルアップさせたりする』を願ったからだ。

結果として、一つの体に二つの魂と言う、いわば常に憑依合体をしているような感じになったのだ。と言っても普段はどちらかが中にいて、どちらかが体の主導権を握る。と言う感じなのだが。

で、神に飛ばされた先が何もない広い野原だったのである。そこから歩いていくと分かれ道があったので霧夜の言った方へと行ってみたのだが、結果はこのように迷っていると言うわけである。

「グゴアア！！」

「るっさい!!」

なんか横から魔獣っぽいのが飛び出してきたので私は左手で超電磁砲、キリヤは右手で原子崩しをぶちかまし、消し飛ばした。

「やばっ。なんかかなり遠くの方まで消し飛ばしちゃったっぽいよ？」

超電磁砲のコインが駄目だったのかな？普通のを作ってたつもりだけど……。

「よし、逃げますか！」

「そこの貴様！止まれ！」

初っ端から出鼻を挫かれた。

「ほらほらキリヤ、呼ばれてるよ？」

「なに言ってるのよサクラ。今は同じ体じゃない」

後ろから響いてきた声に、互いに譲り合いながら向かせようとする。ただ、なんかガチャって音が聞こえてきたので、とりあえず振り返っておくことにする。

「貴様、今の魔法はなんだ？どの文献にも載っていない魔法だろう？」

百人ほどの部隊の中の兵士がそう訪ねてくる。魔法っていつでもなあ……

「いえ、私は別の世界から来た人間でしてね——」

『人間だと！？わが国を滅ぼそうとする敵め！殺してくれる！』

この世界で人間ってそんな扱いやねん。ってかそのいかにもモブっぽいあなたは強いんですかね？

「いやですね、人間は基本善人——」

ふと前の世界の私の扱いを思い出して軌道修正。

「っぽい人ばかりですけど、私はあなた方を滅ぼす気は無くてです

ね、むしろ他の国から守ろうとするレベルですよ？」

とりあえず、神の言葉では、最初に会った者の国を助ける。と言うのが私たちの使命と聞いた。

『嘘だ！人間は昔他の国を滅ぼしたことがあると言い伝えられているぞ！』

「だからですね——」

とそこまで言いかけて向こうの隊長さんがスッと部下の前に手をかざした。

「そんなことを言うてはいけないよ。彼女の言うことが本当なのかもしれない」

物分りの良さそうな人で助かるなあ。ああいう人なら話も通じると思うし。

「（国を守れてどういう事なのかね？国にもまだ兵士は残ってるだろうし、軍事的な面でも強そうなんだけど……？）」

「（たぶんなんか事情があるんだよ。周りの国に狙われているとかさ）」

どちらにせよ、この隊長と話をして国へと行かなければならない。この人数なら突破も可能だが、それでは向かうべき国で指名手配になってしまう。

「どうやら貴女からは危険な感じはしないようだ。先ほどの非礼を詫びてわが国の姫様たちにもお会いさせたい。あちらに馬車が待機しているのでそれに乗って一緒に国まで向かってくれないか？」

これはむしろ好都合だ。移動も楽だし。

「いいですよ。先ほどの現象の説明もしますし」

「そうか！ありがとうございます！私の名はシルバだ。宜しく頼む。」

「私たちはキリヤサクラ、私はサクラでいいです。いろいろと説明したいことがあるので、そちらの姫様とあったときに説明させていただきます」

私の言葉に明るい顔になるシルバ。ホント、まともな人っぽそうだなあ。

ところ変わって馬車内部で

「人間ってホントですか？」

「どうやって異世界から来たんですか？」

「俺にもさっきの魔法を教えてください！」

「ええい！うるさい！！！」

まわりつく兵士どもに私は叫び声を上げて振り払う。馬車に入ったときからこれだ。

「……まったく、人間などと姫様を合わせるなど……危険すぎると言っのに」

なんとなくイラッときたのでこの兵士には地獄道をかけて幻覚を見

てもらふことにする。私たちを危険視した罰だ。

「着きましたよ。サクラ。馬車の先で姫がお待ちです」

その言葉に馬車を降りていくと、そこには金髪碧眼で青の服を着た美少女といえるお姫様が。……あ、やば。

「お姫様あああああ！どうも！貴女のキリヤで——なにさらしとんじゃこのボケがあ——」

私の体に乗っ取って（？）外にいるお姫様に近づいていくキリヤにそれにうっかり口に出して突っ込んだじゃった私。

あー姫さんパニックだよ。そりゃあいきなり前で喋ってる人が自分に罵倒されて殴られたら驚くよねえ。実際、私だってパニックになるし。

「申し訳ありません、この国のお姫様。私の体には二つの魂が入っております、それが同性愛者ゆえ暴走してしまいました」

「（ちょっと！誰が同性愛者よ！私たち、が抜けてるじゃない！）」

「（そつち！？……いや、まあ微妙に否定できないけど……さ）」

私のその言葉に姫さんはようやく落ち着いたのか勝気な目でこつちを見てきて、

「わが名はアリア＝フォン＝ロズウェル！この国の姫じゃ！」

この姫さんはいい人っぽいけど、何でもここまで物珍しそうな顔で言ってくるんだろうね？

「私はサクラ、もう一人はキリヤです。そちらの国では人間が悪と言われているようですが、どういった理由でしょうか？」

「そんな物決まっておる。過去の文献で一度我々の世界が滅ぼされかけたからじゃ」

ドラク。見たいな感じかな？魔族視点で見れば確かに悪かも知れない。

「して、主が先ほど使っていた魔法は危険な物ではないとどうやって証明できる？」

首を傾げてたずねてくる姫さん。なんか馬車から姫さんに伝わって
たらしい。やば……考えてなかったな……。

「えつとですね…… あれは人間が使える特殊な力でして、魔法とは
違う物なんです。それに私は完璧に制御していますから、なんなら
何か精密な動きでもさせられますよ？」

私の言葉に思案顔で俯く姫さん。そして、

「ならば、良い。それに、あれほどの力を持つ物に喧嘩を売って勝
てると思えんしな」

「あ、それなんですけど、今この国ってどういう状況なんですか？」

部隊を軽く動かす国なら結構強い国だろう。どういう状況で守るの
かの把握もしておかないと駄目だしね。

「今この国は、周りの三国から妃を出せ、と言われておる。つまり
私と姉に妹を各国に送らねば国を滅ぼす。ということじゃ」

苦虫を噛み潰した表情になる姫さん。

「（よし！その国に宣戦布告しておきますか！このお姫様を他の人にやるなんて考えられないし！）」

「（キリヤはなに考えてんのよ！いや、そりゃあ脅迫で結婚させるなんて許せないし、その案には賛成だけどさ）」

「（ほら、だったら周りの三国とやらを潰して置けば良いじゃない。この国の領地拡大にもなるし、いいことじゃない）」

そんな会議をキリヤとして、さらに姫さんから詳しい状況を聞く。

何でも、この国はアメリカ並みの国土を持つようだが、周りの国は全てロシア並みの国土らしく、勝ち目が無いこと。

この国では部隊長クラスの人ならばかなり強いが、兵士たちは極端に弱いこと。

周りの三国は全て兵士も強いと言うことを聞いた。結構ピンチだったんだね。この国って。

そんな大国に囲まれてきても、攻められたことが無いのは、その隙に自分の国が他の国に襲撃されたら負けてしまうから。らしい。

各国の力は拮抗しているようなのだが、つい先日、その三国が同盟を結んでし待ってこの国へと妃を出せと脅迫してきたらしい。

「私たちは身を差し出すことも構わんのじゃが、国民が拒否しておつてのう。国民にとってはそれよりもこの国が滅ばされる方がマシらしいのじゃ」

人望のある姫様たちらしいね。そんなことを聞くと、ますますほっとけないじゃないか。もともとそんな気はなかったけど。

「では、私たちを貴女国の兵士にしていただけますか？まずはこの国を救い出しましょう」

まずは、周りの三国に喧嘩を売ってやろう。損な性格だなあ私。あんなだけいじめを受けても他の人間不信（いや、この場合魔族不信かな？）にならないんだから。

第一話 出会いと再開とお姫様（後書き）

はっはっは、なんか次回は暴走の気がしますよ。

因みに、この二人の容姿は、紫の髪に黒目でD、となります。Dの意味は女性の方なら分かりますよね？

次回は兵士になるための力を国の方々に見せ付けて敵国の兵士を倒す話、の予定です。

次回も楽しみにしていただければ幸いです。

それでは、次回の私と霧夜と転生世界を宜しく願います。

第二話 私と敵と入隊試験

「よし！ならば特別二部隊総合隊長の――」

「待ってください！」

「なんじゃ？」

姫さんが言いかけたところで口を挟んだ少女を見る。その少女は緑の髪にロリ仕様な少女だった。

「なんじゃエルザ。この者を特別二部隊総合隊長にするのに何の不服がある？」

「よく分からない力を使う人間が私の上に立つなど、納得できません！」

「（あの、彼女は誰ですか？）」

「（ああ、彼女はヴァミアニアス国王族特別護衛隊第二部隊、通称二部隊の一番隊隊長のエルザだよ。あんな姿だけこの国で一番強いんだよ）」

姫さんに文句を言っている少女について後ろにいたシルバに尋ねる。
なるほど、……ってあれ？それって私たちがあの子の上司になるってこと？

「ならば、そろそろ来るであろう敵兵をキリヤとサクラが倒せば良いだろう？と言うことで、やってくれぬか？」

「いや、いいですけど……いつ来ますか？」

私のほうを向いて言う姫さんに答えていると、ドガン！という爆音が聞こえてきた。……タイミングいいなあ……

「ちょうど来たようじゃ！では、言ってくれぬか？」

瞳を潤ませながら言うてくる姫さん。と、私の体が勝手に動き――

「了解です姫様。それでは、私があの子の敵を滅ぼして参りましょう」

そういつて空を飛ぶキリヤ。

「勝手に承諾するなあ！って言うか滅ぼしちゃ駄目だからね！？」

「いいじゃない。デビュー戦よ？雑魚で練習しておいても悪くないわ」

旗から見ると気持ち悪そうなり取りをしながら爆音のなった方へと飛んで行く。そういえば、敵兵は何人いるのだろうか？

「いや、多いでしょ」「約五十人づつね。今回は自分からの攻撃は避けましょうか。近くによるだけね」

敵兵が居る所に着いたところ、約百人の敵兵がいらっしやっていた。つてか、キリヤ冷静だなあ……

「最初は私からね。よつと！」

キリヤは某第一位さんの能力を発動させて敵兵の中を歩いていく。以外にさつさと敵が散っていくなあ……ベクトル設定を調節して殺

さないようにして入るけど。

「よし、後はもう交代ね。宜しく〜」

早っ！いきなりキリヤが中に来てしまったので危うく倒れそうになる体を、あわてて力を入れて起こす。

えーっと、私は何の自動タイプにしようか……よし、後はあの人の質問に何となく答えてみようか。

「うん。ガソリンの味は知らないけど灯油の味は知ってるね」

そう言っスカーデットて私は致死武器を発動させる。過負荷はお気に入りなんだよね、境遇が似てたからかな？

『何だこいつは！どんな魔法を使ってていやがる！』

『何で鎧の上からこんなに傷が出来るんだ！？ありえないだろ！？』

そんな言葉を口々に言いながらも私が近寄っただけで倒れていく。残るは後二人か。片方は要らないな。

「くそ！お前何を使っているんだ！何の魔法なんだ！」

「他人の傷口を開く。それがこの過負荷——マイナス——スカーデット致死武器だ」

そういつていた兵士の傷口が開く。さて、残りの兵士に伝えてもらおうかな。

「『そちらの国ではこの国を滅ぼすことは到底不可能でしょうが、せいぜい無い知恵絞ってどうやったら勝てるか考えてみてくださいね』って伝えといってくれる？伝えてくれないなら——」

「分かりました！伝えます！伝えますから許してください！」

めっさ怯えられてた。そりゃあ正体不明の力を使う相手がいたら怖いけども……

「サ、サクラ。お前は、そんな凶悪な技を使えるのか？」

その声に後ろを振り返ると、姫さんがいた。なんかこの人は期待を込めた目で見てくるんだけど……

「いや……他にも使えますが、まあ一応今使ってましたしね……」

「ならば私に教えてくれまいか？エルザも認めたようだし」

「サクラさん、いえ……サクラ師匠！私にも何か教えてください！」

そういつて私に擦り寄って来るエルザ。めっさ懷かれとるなあ。

「（キリヤ、この子に手を出したらぶち殺すからね。勝手に手を出しちゃ駄目だよ）」

「（ええ、って言うか、私を殺したら貴女も死ぬんじゃないの？）」

「（あ、そういえばそうだった。それでも、このロリ少女に手を出しちゃ駄目だよ？）」

「（分かったわよ。ちょっと残念だけど、殺されちゃかなわないしね）」

キリヤに釘を刺しておいてから何を教えるか考える。……あー、

「えつとですね、じゃあ、入門編を教えますから、どこか広い場所は無いですか？下手をすると城が吹き飛ぶんで」

「その変な敬語はいらぬ。広い場所は向こうに闘技場があるが、それで良いか？」

「そんなもんで上等です。……あ、ついでにこの世界の魔法についての歴史を見せてもらえますか？」

なんか敬語を変って言われた……。

そんなこんなで闘技場にて、

「まず、この世界の魔法と私が使う能力は違うところも多々あります。ですから、この世界の魔法で代用してもらいます」

「で、これはなんじゃ？サクラ。棒みたいなのは？」

「師匠！これは貰ってもいいのでしょうか！戦場でも使いたいのですが！」

エルザちゃんも段々壊れてきたなあ。そんなに無傷って衝撃なのだろうか？

「別にそれは貰ってもいいから。それで、その使い方は——っ
と、すいません。ちよつと蔓が繋がりましたので」

何となくつけておいた振り子にメッセージが来たので席を外す。誰だろう？いや、まあ一人（？）しかいないけれども。

『はい』どうもどうも神様です 言うの忘れていたけど、その世界では人間の能力が何倍にもなってるからね』

「どこのMARだよ……そういえば、この世界の人たちに能力教えるもいいの？」

『別にそれは構わないわよ？とりあえず、最初の敵に関するイベントをクリアしたら報酬として『ある世界』から作ってもらった物をあげるわね。貴方たちのプラスになるはずよ』

「了解です。それじゃ、オーバー」

『無線のマネをしたいのは分かるけど自重しなさいよ……それじゃね、チャオ』……ズ』

「チャオズ！？何言つて——あ、もう切れてるわ」

とりあえず闘技場の中心へと戻る。そこには不思議そうな顔をした姫さんたちが。

「何の話なのだ？蔓が繋がつてるとか、何の話をしておる？」

「これはですね、この振り子と呼ばれる指輪で連絡を取る手段なんです。離れていても連絡が出来るので便利なんですよ」

「なるほど！師匠がいたところではそんな便利な物が発達していたんですね！」

いや、違うけれども。……まあ否定するのも面倒くさいしほかって置いてもいいか。

「とにかく、その棒に魔力を流し込んでみてください。それで何が向いているかを見ます」

私の言葉に魔力を込める二人。ちなみに、あの棒は某錬金術師（鋼の方ではない）の能力で『魔力測定器をこの手に。用途は魔力種類の測定。数は三つで十二分』といって作った物だ。

で、結果はというと、

「私の物は黄色く光ったぞ？」

「私のは土色に光りましたよ？」

「私のは白く光ったね」

上から姫さん、エルザちゃん、シルバといった具合だ。

黄色は電気、土色は文字通り土、白は無属性に特化した能力と言うことである。エルザちゃんは炎、シルバは肉体強化でここまで強いって言うのだから自分にあつた能力を渡しておけばどこまで強くなるのやら。

……あれ？なんか入門編ってレベルじゃないのしか思いつかないよ？

「姫さんは今から時間割を私に受けて、エルザちゃんはゴーレムについてを叩き込むから、シルバは今からこれを渡すから私が言ったとおりに置いていってみて」

シルバには闘技場の中にルーンを配置してもらう。エルザちゃんには能力説明の概要を叩き込んで、姫さんには――

「サクラ、か、かりきゅらむというのは何だ？」

やばい……なんか慣れない言葉を使う勝気な少女って萌えるわ。

「平たく言えば勉強ですね。いろんな分野についての勉強を受けてもらいます」

ちなみに、これを覚えたからって魔法が使えなくなるわけではない。新たな回路を作らないように教えるからね。

「勉強……？政治についてのか？」

「待つんだ姫さん。なぜそこで国語とか物理とかが出てこない？」

「なんだそれは？そんなものこの世界には無いぞ？」

マジですかい。なんか下手なことを言っただけがするなあ……。

「（超電磁砲にソーロレムの術式にゴーレムⅡエリスか、相当強いメンバーだね）」

「（それほど無いと真正銘の一騎当千にはならないでしょ？それよりも、私が時間割を教えたいのだけれど）」

「（別にそれはめんどくさいし良いよ？にしても、魔法はあっても魔術は無いってなんなのさこの世界）」

「（気にしたら負けよ。んじゃあ、交代ね）」

キリヤとの会話で主導権を交代して姫さんに勉強を教える。キリヤ、勉強を教えるのが好きだったからなあ……。

「ここからどうすればいいんだい？」

シルバがそう尋ねてきた。

「後は魔力を流し込んでみて。それで出来なかったらこの文献が類似してるから学んどいて頂戴」

キリヤが投げた本を受け取ってシルバは歩いていく。自室あたりで読んで勉強するのだろう、と思いきや座って読んでいる。よっぽど興味があるのか瞬きすらせずに見ているよ。

「あの、これでいいですか？」

その言葉に振り返ると、エルザちゃんが見事なエリスを作っていた。そう……見事に、

「小さっ！ある意味すごいエリスだ！」

ミニチュアと変わらないレベルの小ささのエリスがエルザちゃんの手に乗っかっていた。……あ、二体目作ったら壊れた。

「そのサイズじゃまだまだ成功とは言い難いわね。もう少しこの世界のゴーレムについてを勉強しておいて。それでもっと大きくなるはずだから」

「のうサクラ、これでよいか？」

「違いますアリア、私はキリヤです。……こここの問題は答えが逆です」

「難しいのじゃ！何ゆえこれをしなければならん！？」

「それはあなたに今から教えるのが電気関係のものだからだよ！見本を見せようにも——」

「ちよつと待て！」

「なんやねん！」

「我々二部隊隊長＆副隊長は決闘でどちらが優れているかを決めないと満足できません！ましてや、一番隊隊長や副隊長、果ては姫様にまで怪しげな物を教えるなど！」

「（ふふ……いい獲物が来たわね）」

「（いや受けるの！？もうこの称号返上で良くない！？）」

「（やだ）」

「（うつわー、すつごく簡潔な答えだあ）」

なんかいきなりやってきて宣言してくださった人たちが不憫に見えてきた。だって、魔術と超能力の実験台にされるんだし。

「（あ、そうそう、この戦闘はアンタに任せるわよ。眺めていて滑稽な様を楽しみたいし）」

キリヤはものすごく酷い性格でした。……それでも私が思いつき楽しむ気がするけど。

「ゼロにする！わはははは！いけいけえ！ゴーレム！！エリス！」

そんなわけで二部隊と決闘中です。なんか相手が出してきた不出来なゴーレムとかを超電磁砲レールガンで粉碎した後、大暴れ中でございます。

「つ、使えるようになったらあんなに強いのか……」

「あんなに大つきいゴーレムになるんですね……」

「あれが無効化術式か。攻撃されても無傷とは……」

はい。皆様の評価はこんな感じでございます。っと、あちらさん戦意喪失かな？

「我々隊長&副隊長は一生師匠についていきます！お願いします！私たちにもあんな技を教えてください！」

と、土下座して言われたので各属性を調べて教えてあげることにした。そのうち使えるようになるだろう。

……実は調べた意味は何もないけど。

「姫様！三国から連絡が！キリヤサクラを出せと！」

「こちらの者がキリヤサクラだ。この者に通せ」

猫耳メイドさんからなんか電話っぽいのを渡された。聞こえてきたのは……

『君があのだ宣戦布告をしたキリヤサクラと言う者か？話をしたいのでこちらの姫と一緒にこちらに来て貰いたいのだが』

「キングだ。俺様のことはキングと呼べ、畏怖と畏敬を込めてな。まあいいだろう、俺様がわざわざ出向いてやる」

某キングさんのセリフを借りてあくまで偉そうに言ってやる。なめられたら負けだからね。

『了解したよキング。では、三日後にパルクに着てくれたまえ』

そこでガチャンと電話っぱいのが切れた。仕方ないから行ってやりますか。この皆さんも連れて。

「だそうなので、行きましょか、この場にいる全員で。いや、あんまり護衛とかは必要ないけど寂しいでしょ？」

「うむ。私も寂しいな」

姫さんの了承も得たので全員で向かうことにする。これをクリアすれば何かプラスになる報酬が貰えるらしいし、頑張らないとね。

第二話 私と敵と入隊試験（後書き）

今回はパルクまでの旅の話です。どうなるのかは謎。

次回も週一のペースを守れるのやら。

駄文の上に週一で書けないとなるといいよ最低になってしまいましたが、大丈夫でしょうか。

それでは次回の私と霧夜と転生世界も宜しくお願いします。

第三話 私と夜襲と襲撃者

「って言うか、パルクって何？」

「パルクと言うのはアミルカとの国境にある町じゃ」

三国のうちの一国はアミルカと言うらしい。

「そういえば、師匠のいた世界では馬車に乗る習慣は無かったそうですけど、乗り心地はどうですか？」

そう、今のエルザちゃんの言葉通り、私たちは今馬車で移動中だ。この世界には車やらは無いらしい。

「まあまあだね。で、三人とも使えたの？」

「「まだ出来てない（です）」」」

「はあ……………まあ、他の人たちは遊戯王だから妙に簡単に使えたけど」

そう、残りの隊長&副隊長格の方々には遊戯王カードを渡しておいた。なぜなら、面倒くさかったから。本人たちは大喜びだったけどね。

「でもでも！私は大っきなぬいぐるみぐらいの大きさになりましたよ！」

「私もでんじしゃくとやらを使えるまでにはなったぞ！」

「私は十秒出来るようになったね」

上からエルザちゃん、姫さん、シルバである。この三人は頑張ってる分強い力だからね。……シルバだけでもうほぼ使えてるのがすごいと思うけど。

「そういえば、師匠。なんで寝るときは見張り無しで寝るんですか？見張りもいたほうがいいのでは？」

「ああ、それはね、餌だよ餌。一回でも敵さんが餌にかかったら帰っちゃうばいからね」

「なるほど。以外に考えておるんだな」

意外とは何だ姫さん。後エルザちゃん、この程度で感心しない。

「でも、どうするんですか？敵が襲ってきたとしても、迎撃できないければ意味は無いじゃないですか？」

「まあ、彼女には寝ていても身を守る魔法でもあるんだろうね」

「正解だよシルバ。ちょっと試したい物があるからね」

シルバも勘がいいなあ。一番隊の副隊長らしいけど、何歳だろう？

「ねえ、シルバたちって何歳なの？」

「ああ、私は二十だよ」

「私は十七だぞ」

「私は十八です。師匠は？」

「私も十八だけど……エルザちゃんが十八ってマジ？」

「はい。」

めっさ満面の笑顔で返された。ええー、この形で十八？見た目十三、十四歳じゃないの？

「んじゃあ、次の質問。姫さんは答えなくていいよ」

「私は百人は殺したと思います」

「私は五百は殺したかな。姫を狙ってくる敵が多い物で……」

「そつか……私は極力殺さずを貫こうかな」

「（どこのるろうによ。まあ、よっぽどのゲス野郎じゃない限り殺す気は無いけれども）」

その後も質問をしながら時間をつぶす。

「この辺で野宿をするので準備をしています。しばしお待ちを」

話していると響いてきた声で私たちは剣などの荷物を持って立ち上がった。

深夜、皆が寝静まった頃に人の気配を感じた。……来たかな。

「はっはっは、実体化してやったわよー」

「何でお前が夜襲してんだあ！」

なんか実体化して出てきたキリヤを回し蹴りで蹴り飛ばす。

「何してんのさ！皆がいる所で！」

「いる所じゃないならいいの？ならまた今度にするわ」

「そう言つことじゃな——くもない」

私のテントに沈黙が訪れる。もともと私とキリヤ以外はいないんだからそりゃあ沈黙なんだけどね。

「と、そんなこと言ってる場合じゃなく敵さんがいらっしやったわね。んじゃ、今回は私が武器になって戦いますか」

言って人魂モードになるキリヤ。えーっと……じゃあ、これでいいか。なんか合わないけど。

「キリヤ、イン春雨。イン、フツノミマタの剣。OSスピリットオブソード」

ホントこれにキリヤの名前は合わないなあ。一応OSは出来るみたいだけど。オーバーソウル

「何だあれは！あんな刀どこの魔法でも出来ないぞ！？」

なんか段々敵さんの反応もワンパターンになってきたなあ。よし、つまらん。

「空の果てまで飛んでいけ」

全力でスピリットオブソードを振りぬく。半数ぐらいは防御魔法っぱいので守っちゃったけど、残りは綺麗に吹っ飛んで行った。おーよく飛んだなあ。

「まったく、雑魚をよこしといてこの部隊を潰そうだなんて、思い上がりも甚だしいね」

「いえ、師匠。それは<紅の月光>と呼ばれる最強クラスの盗賊集団です」

後ろからの声に振り向くと、えーっと……アルヴィン——通称アル君だったかな？

「って言うか<紅の月光>って月光さんかい」

あ、それ私も思った。だって月光の後に生徒会つけねえ。続けてキリヤは、

「って言うかアル君起きてたの？寝ててもいいって言ったはずなのに」

「ああ、ちょっと目が覚めた物ですから。たぶん他の人たちは寝てると思いますよ」

「ああ、そうなの。それじゃ、今の武器たる私の凄さを見ておくことね」

どうでもいいけど、これってどこから声が出てるんだろう？口らしき物はないしなあ……？

「いえ、どうせ昨日の戦闘のときの感じになるんでしょう？だってから見なくても変わりませんよ」

あ、アル君の言葉にさめざめとキリヤが泣き出した。

まあ、初の顔合わせが攻撃の無力化、圧倒的に格上のゴーレムの召喚、自分が呼んだゴーレムっぽい物の粉碎だったら呆れるわなあ。

「じゃあ、おやすみ、良い夢を、ほらキリヤ、敵さんが無視されてお怒りだから泣いてないでやるよ」

アル君はペコッと頭を下げてテントに戻っていった。で、首領っぽいのは顔を真っ赤にしてお怒り中です……なんかスイマセンでした。

「クソツタレのゴミめ！弱小国の分際で挑発してきやがって！アルス国とロンス国の前にお前らを殺せて命令が来てんだよ！」

やけに説明口調だなあ。しかも、残りの二国の名前まで頂きました。

「しらん。とりあえず俺様の生徒会の名前を使ったことを詫びろ」

「はい黙りましょうねー俺様会長さん。剣から声が出るって結構ホラーだと思うよー」

どうでもよさげな口調でツッコンでおく。何言ってるんだか、キリヤは。

「何が詫びろだ！てめえみてえな長え刀しか使わねえ奴は臆病者の雑魚だろうが！」

「「ピキッ」

『雑魚』の単語に私とキリヤの頭からそんな音が聞こえた。前は言われたことが無かったからなあ。『髪と目が気持ち悪い』とかぐらいしか。

「お望みとあらば小刀でもやってあげようじゃない。具現化拷問器
ウチヤース
具改——『天魔ソード』」
スーパーオーバーソウル

強化版のメイデンのOSで小刀を作る。オーバーソウル 実質、処刑器具のが正しい
けど。

「消えろ、雑魚が」

私が残りの連中に近づいて横に軽く剣を振ると、振った先にいたものが根こそぎ消滅した。天魔の威力を持った刀って最強クラスなんだろうなあ。

それにビビッて大半は消えていったのに、首領さんは逃げやしない。

「後はアンタただけだけど、逃げないでいいの？これと打ち合ってもこの世界の物質ごとときじゃあっさりこれに切断されるよ？」

ぶらぶらと短剣サイズの剣を振りながら訪ねる。対して首領さんは

「ふん、本当に残っているのは一人か？」

「はあ？どう考えても——なるほど、その余裕はそう言っわけね」

テントの方を見ると、どこから回ってきたのか、よりにもよって姫さんが眠っているテントを襲おうとしているこいつの部下が。でも、

「寝ちゃったけど、どうする？一人でも続ける？」

その人には霸王色の覇気で眠っていた。この首領にも——

「使えん奴め。だが、お前が喋ってる間に最初の奴らが戻ってきち待ったぞ？絶体絶命だな」

「そっちこそ、絶体絶命って奴なんじゃないの？ほら、その人とかはアンタに剣を刺そうとしているよ？」

「ぐっ、てめえ、俺には向かうか。いい度胸じゃねえか！」

「威勢がいいのは十分だけど、数を考えなよ」

「お、おい！お前ら！誰に逆らってるのか分かってるのか！？俺様

は――」

あ、首領さん人ごみに呑み込まれた。まあ、ね。

「ジャスト一分だ。いい悪夢^{ユメ}は見えかよ？」

某邪眼さんの能力で幻覚を見て頂いた。いやあ、これって楽しいねえ。傷つけずに出来るどころか重宝しますわあ。

「お、おいお前ら……やめ……」

あーあ。壊れちゃってるよ。しょうがない。こいつら纏めて王宮に送ってきますか。ど真ん中においときゃ気づくでしょ。

さっき逃げた奴らは結界で逃げられなくなっていたのでそれも纏めて飛ばしておく（まあ、その結界に触れたら気絶するようにしていたので全員気絶していたけど）

「さて、パクリな不屈者は倒したし、寝ましようか」

「パクリ扱いされたこの人たちが哀れだけどそうだね。……って、なんでナチュラルに私と同じ寝袋に入ろうとしてるのかな？そもそ

も、キリヤって私の中で寝てればいいんじゃないの？」

「……ちつ。しょうがないわね。また今度にするわ」

「舌打ちしたよこの娘……うん。じゃあ今度にして頂戴」

そんなやり取りをした後、キリヤを強制的に戻して寝る。うん。いい夢が見えそうだ。

「ハアイ、どうもどうも神様でーす、撃退してくれたようだし、報酬を渡すわね」

「どうでもいいけど、神って夢の世界にまで出てこれるの？」

「そんなの容易いことよ。んで、報酬は某機械功少女の世界で花柳マシンドール斎に頼んで作らせたキリヤの人形よ」

「へえ……ずいぶん私に顔を似せて作れてるのね」

「まあそりゃあ禁忌人形^{バンドール}だからね。いやあ、作らせるのに苦労したわ、したわでねえ。雪月花って名まで貰って、ある意味異端中の異端ね」

「よし、まずその説明は待とうか。そもそも、禁忌人形って生身の肉体が原料でしょ？どっから作ってるのよ？」

「そりゃあ、まあ、確かに？『同じ世界には転生できない』って言ったけどさ……『同じ世界に肉体だけを復活させる』のは良いんだよ。だから、それを持って依頼に行ったわけ。簡単に作ってくれたわよ？」

「さっきアンタ苦労したとか言ってたよね？……はあ、まあいいや。とにかく、それが報酬ってことね」

「ええ。それとの魂の分離も可能な上に、私の計らいでく魔活性不協和の原理は解消させといたわ。どんな魔術回路だろうが使えるわよ」

「そもそもチート能力をくつつけたやつが何を言うか。まあいいわ、これがあればサクラとイチヤイチヤ出来るしね」

「あんまりこれが十五、十八禁になるようなことはしちや駄目よ？

それじゃ、チャオ」

「「チャオ」」

第四話 私と初めてとゲス野郎

「で、自動人形マシンドールになったのは良いんだけど、なんで私の寝袋の中にいるのかなあ？」

「違うわよ。正確には神性機巧マシンドールになってるもの。リアルに神から作られたからね」

「もしもーし？確かにあつてはいるけど私が聞いてる事とは答えが違いますよー？」

なぜか起きたらキリヤが寝袋の中にいた。因みに、何で生身の肉体があるのにそれを渡さなかったかは、『転生させられるのは一人限定』だからだそうだ。

「あの……師匠？もう朝ですけど……どちらさんですか？その方は？」

エルザちゃんが TENT を空けて入ってくる。あーそういえば初対面だっけ。

「あのね、これはキリヤなの。私と同じ体に入っている魂の……入れ物？」

うん。間違っではないない筈。実際、このキリヤは黒髪に赤い目のもとの体とは違う容姿だし、顔が似ているだけだからね。

「ああ、そうなんですか。それでは師匠、キリヤさん。朝食の用意が出来ていきますのでこちらへ」

エルザちゃんは一瞬呆れた視線をキリヤに向けた後、テントから出て行く。どうやらエルザちゃんはキリヤを師匠と呼ぶ気は無いらしい。

「なんか、アンタのせいで越えられない壁を作っちゃったような気がするわ……」

「この世界では元からじゃないの。ホント、なんで前はあんなにカリスマ性があったんだか」

「それはこの性格を隠してたからじゃない？ 実際、アンタは赤髪に黒目は気持ち悪いって言われてたのに私は別に何にも言われてなかったんだから」

「否定はしないけどもねえ。っと、さっさと出てくよ。あんまり二部隊の皆に迷惑かけちゃ駄目だし」

その言葉で私たちはテントから出る。用意されていた私たちの席に座ると、アル君が口を開いた。

「それで、師匠。昨日の＜紅の月光＞はどうなりました？見たところどこにも見当たりませんか？」

「ああ、あのパクリ連中は王都に送つといたわよ。転移のときに拘束しといたから何も出来ないだろうっしね」

「ちょっと待てキリヤ！＜紅の月光＞とは何の話だ！？」

「ああ姫さん。それは昨日襲ってきた盗賊段の名前ですよ？」

「そんなことを聞いておるのではない！そもそも、なんで＜紅の月光＞がこのあたりにいるのだ！あいつらはアミルカの先を拠点にしているのだろ！？」

叫ぶ姫さん。へー、あいつらってアミルカの先に拠点があって協力してたのか、大方、あれが成功していれば貴族とかになれるって餌で釣ってたのかな？

「アリア、多分アミルカが何かの餌で釣ったのだと思うよ？アルス国とロンス国の前にお前らを殺せって言われたんだよ。って言うてたし、この国滅ぼしたら他の二国も潰す気だったんじゃないのかな？」

「だけど、アミルカとアルスとロンスは同じ強さを持つ国といわれているからそれは出来ないんじゃないかい？勝てないだろう？」

キリヤの言葉にシルバがそう返す。あれ？漁夫の利って言葉を知らないのかな？

「それはまあ、この国には十人以上の一騎当千のメンバーがいるでしょ？二国で行ったとしても無傷で勝てるわけではないから、そこを同等の強さを持つ国が襲撃すれば勝てるじゃないですか。いわゆる漁夫の利ってやつです」

私のその発言に皆は驚いたような顔をして、

「成程……ぎよふのりがなんなのかは知らんが、確かにそれなら同じ強さの国にも勝てるな……」

「っていつか、何で気づかないんですかアンタら。そんなこと——ああそうでしたね。この世界には勉強が無いんですよ！」

忘れてた……それにしても、この国にはなんで勉強が無いんだろう？おかげで人に教えるのが大好きなキリヤは生き生きしているけど。

「それでも、そんなふざけた幻想は、私たちが全部ぶち壊してやるんだけどね」

ああ、キリヤが黒い笑みを出しているよ……月光が大好きなキリヤとしては名前がかぶっているのは許せなかったんだろうね。

「フラグ乱立駄目男さんの物真似はいいから。それで、姫さんたちもアミルカぶつ潰しに着いてきますか？正当防衛として潰しにいけるので私たちは行きますが」

「何言ってる、こいつらは何のための護衛隊だ。それに、サクラにキリヤが守ってくれるだろうしな」

「師匠から習った技をしつかりと使えるようにします！それならきつと向こうの国の人たちにも勝てますから！」

「私も五分は止められるように鍛えようと思うよ。あれは本当に役に立つからね」

「というか、僕にも師匠から教えてもらいたいんですが……実は皆が貰っていたカードも貰ってませんし」

意気込み十分らしい。ってあれ？アル君にカード渡してあげてなかったつけ？あまりにも空気で気づかなかったご要望どおりに技を教えるにしても……

あ、あつたわ。あれがいいね、うん。この子にピッタリだ。ついでにこの子の彼女にも、

「えー、それでは。そのエミリイさんと一緒にこの雷を完璧に扱えるようにしてください。それに関連することが乗っているの」

書類を渡しながら某アネモネの雷を近くの地面に向けて放つ。地面に隕石が落ちたようなクレーターが出来たけど、私は何も知りません！

「す、すごい威力ですね……こんな魔法は見たことがありません」

「アミル力潰した後に君たちに勉強教えるからそのときにしっかりと学んだきなさい？一応、万物を灰燼と化すって定評のある雷だけと相性があるかも知れないからね」

「万物を灰燼と化すとは……今更ながらお前らはどこからそんな魔法を学んでいたのだ？」

姫さんのそんな問いに少し考える。

……まあ、これでいいかな？

「私たちの居た国ではこういったものを書いた書物が流行っていたから、それを見て覚えたんですよ」

「ほお、そんな者が人間の世界にはあるのか……。だが、そんなのが流行っていて治安は大丈夫なのか？」

「それはこんな魔法を使う人が居ないので、治安は容易く保たれますよ」

うん。嘘は言っていない。因みに違う世界を遠い国と解釈したようなので最早否定も止めました。

「さて、それじゃ、全員に教えた技を見せてもらいましょうか。ほらほら、そっちの隊長、副隊長たちもこっちきて、ちゃんと扱えるかのチャックをするから」

キリヤが別のテーブルで朝食を食べていた二部隊の方々にも呼びかける。それは私も気になっていたからちよつどいいかな。

「はい！えつと、魔法カード発動！黒・魔・道！」
ブラックマジック

正直どうでもいい連中全員に渡したカードはこれ。本来は先生しか使えないけど、これは私が使っていいと認めたら使えるようにしてある。

因みに、効果は相手の装備品の破壊だ。

「んで、そつちの最強組みも使ってみて。一応障壁張つとくから」

キリヤが言つてるときに私は、某グリモアリスの障壁でここ以外の地形を変えないようにしておく。危険だしね。

「はいはい、ちよつとやる前に、アル君とエミリイちゃんにアリアはシルバを狙って雷を撃つて、エルザちゃんはシルバの後ろにゴレムを出して雷をかき消してみて」

「分かった。はっ！」

キリヤのその言葉でまず姫さん、アル君、エミリイちゃんがシルバに向かつて雷撃の槍を出す。といっても、三人ともまだまだ細いんだけどね。

「ゼロにする！……っと、これでいいのかい？」

「ゴーレム」エリス！……えーっと、これで良いんですか？」

「ご苦労様。じゃあアドバイスね。まず姫さん、なんでアンタはさつき習ったばかりのこの二人と変わらないのよ。アンタのが先に習ったでしょう？」

「いや、それはちょっと調子が悪かっただけで……」

「はあ、まあいいよ。で、次はエルザちゃん。あのエリスはまだ小さいね。あの二倍の大きさのが完成したときの大きさ」

「分かりました師匠！もっと勉強しておきます！」

ピョンピョン跳ねながら返事をするエルザちゃん。どこの姫さんとは返事が違うね。

「後はその二人はさっき教えたばかりだからいいとして、シルバも問題ないわね。とにかくゼロに出来れば上出来よ」

「了解したよ。でも、君には及ばないんだろうね」

「そりゃあまあ、その技の対処法も知ってるし、無効化もできるしね」

「やはり敵わないね」

肩をすくめてそう言うシルバ。シルバも十分強いと思うんだけどね。

「じゃあ一応言っておくわね。その技の弱点は『一々指定しないと無効化できない』と『武器と認識した物しか無効化できない』よ。覚えといてね」

「了解だよ。それなら遠くから無効化して戦闘を行った方がいいね」

それが賢明ね。とシルバの言葉に霧夜が頷く。

「ああもう！早く行くぞ！」

姫さんが立ち上がって馬車の方へと向かっていく。……しょうがないなあ。

「私達のお姫様はちょっとあれな人のようね」

霧夜が肩をすくめながら歩いていく。……全く持って同感です。

「姫さんは馬車にいること。攻撃したいんだったらそこから電撃で狙撃して」

霧夜の言葉に姫さんは不満そうな顔だったが、黒・魔・道ブラックマジックの連中に土下座で『仮に怪我をさせては我々の首が飛びますので此方に居てください』と言われて渋々馬車に入っていた。

「ってか、あの城でか過ぎない？」

「あれは三国のお偉いさん如きがいる中心部です。実際、あそこを潰せば周りの三国は潰したも同然です」

エルザちゃんが心底嫌そうな顔をして説明をする。……なんだ。だつたら良いじゃない。

「ただし、君達は三国のトップと会談をしなければならないよ。――応啖呵を切つたんだから」

「面倒くさいわね。あんなこと言っくんじゃなかったわ」

霧夜がため息をつきながらそう言う。はあ、ホント面倒くさい……

「レディーを会談に誘うのに、この誘い方は些か乱暴だと思うのだけれど」

私達の周りを敵の兵士が囲んでいった。まったく、どういう誘い方なのさ。

「少々手荒な真似をしてすまないね」

「君達が来るときに<紅の月光>が君達を襲ったのは此方の落ち度だ。すまなかった」

「我々も君達の国を潰そうとしてるんじゃない。君達へ攻撃するのは、勘違いをした兵士が勝手に行動してしまうからなのだよ」

「「「「「.....」」」」」

上からロンス、アミルカ、アルスの大臣。最後の六人は三国の王子様&お姫様らしい。妙に目が虚ろな子供だけど。

「いえいえ、それはこれほどの大国を持つ方の悩みでしょう。気にしていませんわ。すっかり洗脳してしまいましたが、何も情報は聞けませんでしたし」

ニッコオオオオオオ！と輝いた笑顔で大臣共を霧夜は見る。どこぞの知弦さんの様に不愉快であればあるほど輝きが増すらしいから、相当不愉快なんだろうな……。

「それで、なんの御用でしょうか？」

気持ちの悪い口調でニコヤカに話しかける。演技なんか面倒くさい

のになあ。

「いやなに、そちらの国と領土を分け合おうと思ってね。その国は姫を、此方は王子を出して結婚させれば半々だろう?」

「それで、この契約書にサインしてもらいたいのだよ。此方もサインをしよう」

「ええ、いいですよ。では、書くのは此方の契約書でいいですね?」

霧夜が契約書を受け取って確認する。大臣共はしっかりと頷いた。

「……ところで、其方の方々は?」

「ああ、これは少々うるさいから洗脳させて黙ってもらったこの国の王子さ。問題ないだろう?」

「ええ、そうですね」

キリヤが尋ねた質問に、大臣共は何でもなさそうな調子で答えた。
……ふーん。

んで、契約書の方は…… っと、なになに、『領土を三分の二譲る』
『三国へと民を永住させる』か。

ここで私たちの性格について言うておこう。私たちは人殺しはしない。と回りから思われているが、それは間違っではない。かえるだろうと虫だろうと極力殺しはしない。だが、

「それでは、どうぞ」

私はニコヤカに、それでいて平淡な声で紙を相手へと渡す。

大臣共が受け取った瞬間、その紙はドガンッ！！と轟音を鳴らして爆発した。

「ゴミ掃除は別。貴様らが逃げ切れると思うなよ。千里眼からは逃げられんぞ、覚悟をしるよ大臣共^{ゴミ}」

大臣共^{ゴミ}は消えていた。魔法で姿を作っていたと言うところだろうか？

っと、王子&姫様を助けてかないとね。多分これは洗脳されてるし

……

「メンタルアウト
心理掌握の能力の方がいいかな？かなり深いからゆっくり洗脳を
解いた方がいいみたいだし」

「こんな可愛い子達によくもやってくれたわね……。サクラ、昨日
夢でやったアレやるよ」

「ええっ！アレやるの！？別にいいけど味方の皆に見せる物じゃな
くない？」

「いいからやるのよ。はい、戻るから」

そう言つてキリヤは人形ドールから抜けて私の中に入ってきた。……はあ、

「我、目覚めるは——」

始まりだっ！　そう、全ての始まり

「全ての理を奪いし天竜なり——」

あれからだっ！　あれが原因だった

「無限さげすを嘲み、夢幻を愛す——」

『なんかさあ？シルバとかエルザちゃんとか啞然とした顔で見てるんだけど？』

『ホントね。アレンジバージョンの呪文が気に入らなかったのかしら？』

『いや、そもそも知らないと思うから。普通に考えてこの姿でしょ？』

「そ、それも君達の魔法なのかい……？」

「師匠つてすごいんですね！こんな形態変化魔法まで覚えているなんて！」

シルバが軽く引いて聞くのに対し、エルザちゃんはまたピョンピョン跳ねながら言うてる。

……エルザちゃんは無条件で尊敬するようになってるのだろうか？

『はいはい。今から兵士達をここから追い出すから、ちょっと離れる……まあどうせ耳を塞いだ方がいいけど、離れるか耳を塞いど

いて
っ』

「へ？キリヤさん。何ですか？」

『いいから、エルザちゃんも耳塞いでね』

私がそう言つと、エルザちゃんはすぐに「分かりました！師匠！」
と言つて耳を塞いだ。……さて、と。

『ボオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
おおおお！』

下手するとヴァミアス国まで聞こえるような叫び声を上げる。想像できない人は完全虚化の一護の叫び声を思い浮かべてみよう！

『うわああああああ！』

『ば、化け物だああああああああああ！』

「す、凄い音だね……」

「はううつ、凄い音でした……」

兵士の恐怖の声&逃亡音に、シルバ&エルザちゃんの感想。一応、耳は塞いでいたみたいだけど……っつと、

d D i v i d D i v i d D i v i d ! ! ! ! ! ! ! !
D D i v i d D i v i d D i v i d D i v i d D i v i
i v i d D i v i d D i v i d D i v i d D i v i
i d D i v i d D i v i d D i v i d D i v i
i d D i v i d D i v i d D i v i d D i v i
i d D i v i d D i v i d D i v i d D i v i

城のほうから飛んできた……これは、魔力の球だろうか？を半分に、さらに半分にと繰り返し返して、規模が伝わらないかもしれないが、体育館並みの大きさだった魔力の球を、本のページ並みの薄さの球にした、といった所だ。

『上等ね。そっちがその気なら、さっさと終わらせてあげるわ』

ある意味無双だね

ガシッと鎧の胸元と腹部が開いていき、発射口が出てきた。そこに漆黒の波動が集まっていき――

[illegible]

「あ、ありえん！あれは三国が開発した最強の魔法なのだ――」

『これで果てろ』

Longinus! ! ! ! ! ! ! !
ロンギヌス スマッシャー

ズバァアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ンッ！！！！

漆黒の光線が起こした、余波の音が響き渡った。

その攻撃が直撃した城は、最早跡形も残ってなかった。そもそも、お決まりのセリフを吐いたゴミなんかを生かしておく気は無かったからね。

「ふう、スツキリしたわ」

「ゴミ掃除も終わったし、兵士も巻き込んでないみたいだから良かったね」

「あっちゃあ、あれは跡形も残っていないな。あれを狩に来たって言うのに、無駄足だった見てえだ」

私達がそんな会話をしていると、不意に少年の声が聞こえてきた。

「……兄さん（兄様）……」

突然現れた彼の姿を見て、シルバとエルザちゃんはそんな事を呟いた。

……ん？どっちも兄って言ったってことは、二人って兄妹だった訳？それならそれで、言ってくればいいのに。

「出来の悪い妹か。それで、そっちがさっきの攻撃を放った奴だな？」

「まあ、そうだけど？なにか？」

私の言葉の直後にエルザちゃんが反論していると、この兄は「うちの世界に関わるなと言ったはずだ」と言った。

何となく、こんな感じの人を何かで読んだ覚えがあるんだけど……？

そんな事を考えていた私達に、彼は、

「俺と勝負しろ」

と宣言したのだった。

「……………はい？」

第四話 私と初めてとゲス野郎（後書き）

何この話……。

作者の私にも意味不明な話でした。こんな事言っちゃ駄目ですが。

今回は、彼女達の苗字が明かされる予定ですので、次回も見ていただければ幸いです。

それでは、私と霧夜と転生世界を宜しくお願いします。

第五話 私とシスコンと決闘と

「……だるい……だるすぎる……」

「ハイ皆さん？セーの、」

「不幸だァアあああああああああー!!」

「とりあえず、さっさと始めるぞ?」

私達が叫んでいると、若干引き気味の兄——もとい、ダルクが剣を構えながら言ってきた。

……ノリって者は重要だよ?

「——始まりと呼ばれる、偉大なる元素よ——それは全ての生命に力を与え、滅ぼす術を与えた——それを罰するは裁きの水——その名は水、役割は兵士——現れろ、全てを滅ぼす、最強の魔人よ——」

某不良神父っぽい詠唱をして、ダルクが呼び出したのは、水の魔人。

純水製らしく、周りにあった石などが融けている。……こわっ。

「なら、私も……」

世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ（MTWO
TFFTIOIIGOIOF）

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり（I
IBOLAIIOE）

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸
なり（IIMHAIIBOD）

その名は炎、その役は剣（INFIIIS）

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ（ICRMMBGP）」

キリヤは、ニヤリとしたり顔で笑って、魔女狩りの王イノケンティウスを呼び出した。

……おお、こうしてみると、ますますあの水の魔人ってそっくりだ
な。

「あ、あれって確か……失われた魔法ロスト・マジックだったはず……」

どっかで聞いた覚えのある呼び名だな。主にどっかの作品で。

あ、因みに、今私達は、どっかの森にある割と開けた空間に集まっ
て戦うことになりましたわよ

……なんかすいませんでした。

「つて、私もなんか——」

「ああ、今回は私だけでやるから、サクラはいいわよ」

私がなにか召喚(?)しようすると、キリヤにそう言われた。

……まあ、一対二は卑怯だと思うし、前回私が一人でやったからいいんだけどね……。

「さあ、義兄さん？始めましょうね」

「な、なんか……キリヤの発言、字が違う気が……」

ええそうですよ、シルバ君。あれはあなた方の親戚にする気は無いので、安心してください。

「ああそうだ、消火用になんか作つとかないと……まあいつか。燃えて——」

「だ、だ、だ、駄目ですよ、師匠！ここは世界遺産に認定されてるんですから！」

なんでそんなところを会場にしちゃうかなあ！？

と、私が驚愕していると、向こうではダルク対キリヤのバトルが始まるどころ……ところだった……。

「フハハハハ、これは闇のゲーム。負けたものには、この暗闇に消えてもらっぜ」

「なんでそこでバクラの思考に言っちゃうのかなあ！？そもそも、この世界には遊戯王なんて無いからね！？」

「へ？師匠。この世界ってどういうことですか？」

「だあチクショウ！説明が面倒くさいから触れないで！」

私がそう言つと、シルバちゃんはあっさり引き下がってくれた。

……ありがたやゝありがたやゝ。

「つと、こんな事している場合じゃない！さっさとこの辺に障壁張
つとかないと！」

勿論、闇のゲームは止めさせてから、障壁を張っておく。

本当に適用されて、死んじやったら洒落にならないからね。

「ふん……。いけつ、ケルビム！」

「ふん……。いけつ、負け犬の武器！」

いや、負け犬で……。

確かに？あの某不良神父は我が名が最強である理由をここに証明す
る（Fortis931）とか言う魔法名やら、魔女狩りの王……
その意味は……必ず殺す！とか決め台詞があるくせに？
イノケンティウス

相性が悪すぎる幻想殺しは良いとしても、錬金術師やら、シスター
を全員見逃したりとか、運び屋に初戦でやられたりとか？極めつけ
としては、御天墮し（エンゼルフォール）では、あっさり術式に負

けてたりとか……以外にきりが無かったな……。

と、とにかく！あれは魔女狩りの王が悪いんじゃない？……多分無くて、悪いのはどっちでもないはず、そう、そのはず！

「よし、使えないわ」

「諦めんの早くない！？」

最初のぶつかり合いで、どちらも半分ぐらい体が消し飛んだようだが、早々にキリヤは互角の勝負をしていた魔女狩りの王を消そうとするので、ツッコミつつ、止めておく。

「この程度か……？」

ダルクが呟くと、ケルビムはすぐに再生して行った。

……うーん、ケルビムとか、誰かに似ている気が……？

「ああ？上等だ固羅」

そこでキリヤはニヤリと笑い、

「出ておいで——」

「クレイジーキルト!!」

鬱陶しい人形を召喚。

「おやまあ？誰だいアンタは！あらら、そんな顔しちゃって酷い子だよ！」

『うんっ』

はい、皆さん。我々もそう思ってます。

「……おい、なんだ？その、変な物は？」

「へ……、変な物だって！？キー、コンチクショウ！なめた事言ってくるじゃないのさ！」

「だったら、宜しく」

キリヤが鬱陶しそうに言うと、クレイジーキルトは息を吸い込み、

「夢のナ・力で見た！！星座を！いちいち覚えているほどあたいはおヒマではないのさ……！！」

なぜ！？

キルトの繕いをたくさん！たくさんしなくちゃいけないのさ……！！」

超音波を出すクレイジーキルト。

……うるさい。本当に魔力が高いみたいだから、たいしたこと無いけど、横のシルバとエルザちゃんはすごく頭が痛そうにしている。

流石に、この二人も、あのドリルババアよりは魔力が高いけど、兄の方まで不快そうな顔しているから、かなりのダメージがあるんだろう。

「さあさあ、お次は————ウンディーネ！」

「あなたたちがサクラにキリヤ？宜しくね」

「「ああ、宜しく」」

「それで？今回私が倒すべきは……」

そこで、なぜか私達のことを知っていたウンディーネは、ケルビムを見て、

「あれでいいかしら？」

「ああ、そうよ。宜しく」

キリヤがそう言った瞬間、ウンディーネは、

『アクアニードルス！！！！』

と、技を放った。

それを受けたケルビムは、四分の三ぐらい消し飛んでいたが、もう再生を始めている。

「くっ、だが……まだ甘い！」

「いや、これでツミよ？ 魔女狩りの王」
イノケンティウス

キリヤが、イノケンティウス魔女狩りの王を突撃させる。

まあ、さっき同じ質量でぶつかり合って、半分ずつ消し飛ばしたんだから、今回ぶつかり合えば、イノケンティウス魔女狩りの王が勝つよね。

つてな訳で、チート能力者の勝利。……まあ、当たり前だけど。

ああ、そうか！ 誰かに似ていると思ったら、神無さん家のお姉さんか、シスコン野郎だ！

ああ、なるほど、だからケルビムって呼び方もしっくり来るんだ。
なるほどなるほど。

「くそつ、なぜ勝てなかった！最初は互角だったはずだ！」

「いやいや、最初はフルコースじゃなかったし……。それでも、魔女狩りの王と同格ってのは凄いけども」
インケンディウス

と私が、フォローなんだか、けなしてるんだか分からない言葉を言っている、キリヤが目で、

『例のやつ、あれにやったらどうなるか実験してみて』

『アンタ鬼！？なぜにわざわざ心を折る様な……』

『いいからいいから。それで耐えられなかったら、義兄さんにはなれないわ』

『アンタが勝手に呼んでるだけでしょ……。はあ……。分かったよ。ただし、どうなっても知らないよ？』

そんな会話をして、ダルクの方まで歩いていく。

私は、ダルクの前に立つと、某最強キャラ（過負荷^{マイナス}）のセリフを言う為に、息を吸い込む。

「『受け入れる事だよ』『私達に勝ちたいなら』

『不条理を』『理不尽を』

『墮落を』『混雑を』

『嘘泣きを』『言い訳を』

『偽善を』『偽悪を』

『いかがわしさを』『インチキを』

『不幸せを』『不都合を』

『冤罪を』『流れ弾を』

『見苦しさを』『みつともなさを』

『嫉妬を』『格差を』

『裏切りを』『虐待を』

『風評を』『密告を』

『巻き添えを』『二次被害を』

『愛しい恋人のように受け入れる事だ』」

うん。これは、実際に聞いたら本格的に心が折れそうだ。って言うか、常人には無理でしょ。私は出来るけど。

「そうか……そうすれば……」

「あれ！？意外と乗り気！」

私がツツコムと、キリヤが目で、

『ね？こうなるでしょう？』

と言って来た。……そのドヤ顔がうざい……。

「……と言うか、このシスコンは……戦闘狂？」

「所謂三本柱つてのが、この義兄さんは、『友情』『努力』『勝利』
じゃなくて、『妹』『妹』『弟』なんじゃないの？」

「ああ、ほぼ、どこぞの変態なのか」

「……ケルビム」

「あの、師匠？兄様は気性が荒いので、あんまり言つと……もう遅
すぎますね」

私達がそんな事を言っていると、半分キレてるダルクが、さつき消えたはずのケルビムをもう一回作って、私達の喉元まで腕を近づけさせていた。

……そりゃ、大嘘憑き（オールフィクション）で死んでも復活するけどさ？

純粹の魔人で、しかも失われた魔法ロスト・マジックだったら、安易にツツコミに使うのはどうかと思うのだけれど……。

「ああ、そういえば、敗者は私と彼女の結婚を——ゴハア!？」

「お前は帰れ!……で、少し話が聞きたいんで、ちょっと二人つきりで向こうへ行きませんか？」

ふざけた事を言い出したキリヤを、鈍器で殴ってどこかへ空間移動テレポートで飛ばす。

で、いろいろ気になったことを、恐らくこの兄は兄妹（主に妹）の前で言いたくないだろうと思ったので、場所を移す提案までする。

「……分かった。なら、こっちにきてくれ」

周りは若干、キリヤが消えたことに驚いていたけど、まあ、あまり気にしない方向にしたらしい。

……で、ダルクについていくこと三分。

「意外に開けた場所があるのね……。だったら、ここで戦えばよかったんじゃないか……」

「ここは、俺が勝手に開拓した場所だからな。知られるのはまずい」

三分ほど歩いた場所にある、東京ドームぐらいの開けた空間は、ロスト・マジックダルクが失われた魔法の練習に使っていた場所らしい。

本当に世界遺産に認定されているらしく、ここを破壊することは世界を敵に回すことと同じだとか。

……本当になんで、そんなところを会場にしちゃうのかな……。

「それで？話って何だ？」

「ああ、話つてのはさ、まず、三兄妹の正体とか、アンタの役職とか……まず、この辺が一番気になるところだね」

私の質問に、少し思案する顔を見せた後、ダルクは口を開いた。

「俺の役職は、ヴァミアス国専属の、傭兵だ」

「傭兵……なんだ、あの国、そんな役職もあつたんだ……。だった
ら、そっちにすれば良かったな……」

私が呟くと、ダルクが、お前はなんの役職なんだ？と尋ねてきたので、特別二部隊総合隊長と言うと、微妙に驚いた顔になった。

「まあ、それは良いとして……で、もう一つの応えは、エルザは知らねえが、まずは、俺の本名を覚えておくか」

と言って、ダルクは警察手帳的な物を私に見せた。

……なにに？

「ダルク・フォン・ローレット？あれ？これって……」

「そうだ。ヴァミニアス国の王族と同じ一族だ」

緊急ニュース！エルザちゃんとシルバは王族だったらしい！

「……って、何で王族が護衛部隊に居るの？」

私が疑問を投げかけると、ダルクは予想外にもカッコいい笑みを見せて、

「俺達の一族は分家だからさ。つつうか、シルバに聞いてなかったのか？」

「……聞いてないけども、まあ、なるほど？実際どうなのか知らないけども、分家は本家の護衛ってのはよく聞くね」

「で、エルザは混乱しそうだから教えてねえのさ。意外に、アホだからな……アイツ」

妙に黄昏る姿も、意外にカッコ良いんだけど、悩みが普通すぎて笑

ってしまった。

笑ったら、顔を真っ赤にして怒ってきたけど、まあ、面白いので良しとする。

……何気に、初めて長い時間、笑いながら話した男がコイツだった訳だけど……ま、いつか。

第五話 私とシスコンと決闘と（後書き）

ハイ。駄文を読んでくださってありがとうございます。

現在、無謀どころか、どうせ出来ないんだからもう止めるよ。

とかツツコミが来そうですが、三作品目の構想を製作中です。

実際、完成するかは分かりませんが、結局、ほぼチートの話になりそうです。

……転生者ではないですが。

そして、本当に完成するかは謎なので、期待は全くしないでください。

むしろ、期待どころか、もっと話の質を上げるとお叱りが来そうですが。

それでは、意図的に内容にまったく触れなかった、

私と霧夜と転生世界を宜しくお願いします。

……こっちでも、略称を募集しようかな？

いやいや、来ないだろうしな……（チラッ）↑黙

第六話 バカと教育とマジギレと（前編）

えー、彼等の兄妹が、私の感性では非常に面白かったことはおいて、

「おそい！！何をしておったのだ！？」

すっかり忘れていた、姫さんの元へと戻っていた。

やっぱりここからでも、あの黒い龍の叫び声は聞こえたらしく、直後に鳴り響いた爆音で戦争（と言っていい規模なのか分からない）+ あれは

一方的な殺戮のが正しい気がするけど）が終わったと思い、もう帰ってくる頃だろう。と思っていたら二時間帰ってこなかったので、アル君

とエミリイちゃんと修行をしていたのだけれど、あっさり追い抜かれて心細かったとのこと。

「……………この人には、別の物をあげたほうが良いかも知れないわね……………」

私達二人の決断は、間違ってたと思う。

「エレクトリック・アイ！……おお！？出来た！出来たぞ！」

城に戻ってすぐ、指輪を渡して、エレクトリック・アイを使わせてみたところ、今まで超電磁砲レールガンが使えなかったのが嘘のよう

に使いこなしていた。

この人は、よほどバカなようで、恐らく、超電磁砲レールガンに多少のバカでもなれる様な時間割カリキュラムだったのに、『よほど

』のバカなので使いこなせなかったのだろう。

おかげで、キリヤは不満げな顔だ。

「ああ、そういえば、アル君とエミリィちゃんは、あの雷雷が使いこなせるようになったの？」

「ああ、ある程度は……」

声を揃えて、だけど控えめに返してきた。

なら、キリヤが教える余地もあるだろう。

「あ、ダルク。今から私部屋に行くから、ちょっと誰も中が見えないように部屋の前に立っていてくれる？」

「……別に良いが……なんで俺なんだ？」

「いや、エルザちゃんもシルバも忙しそうだからさ。一番暇そうなのがアンタでしょ」

まだ不満そうなダルクを強引に納得させて、私達に割り振られた部屋へと歩いていく。

因みに、部屋の方は、この城までの移動中に私達の元の部屋と同じ内装に変えてもらっておいた。

いや、球磨川さんやら、ジョーカー（ナナシでもあると思うので、私達はナナシも含めてジョーカーと呼んでいる）やらと、まあ何て言う

んだらう……悪役タイプっていうか、そんなところの連中のポスターが貼ってある。

部屋には、ポスター以外にも過負荷^{マイナス}の名言（残虐セリフ含む）や、二次元での名言（主にラノベ）などが貼ってあり、ポスターもそうだが、何も知らない人に見られたら意味が分からないと思う。

「さて、俺はここで待っていればいいか？」

「うん。それじゃ、他の人に見られたくないから、誰か来たら追っ払っというて」

「しゃーねえな」

ぼやいていたダルクに言って、私は部屋に入る。

……三……二……一……シヨリフノウデス。エラーエラー

……はっ！あまりの怒りで意識が飛んでた！

「……おい、まだグホオ！？」

扉のところにダルクが居たのなんか知らなかったので、思いつき
怒りに任せるままにあげたら、早くしろとも言わんばかりの顔で
言う

ていたようで、扉が顔面に直撃したらしい。数メートル吹っ飛んで
ったけど、良いよね？

「ダルク、結構位が高いらしいし、この国での発言権は結構あるよ
ね？」

「痛つてえ。ん？まあ、あるが？」

「だったら、この城に居る魔族全てを一部屋に集めて」

「……まあ、そのくらい出来るが……いや、まあいい。理由は俺が
適当につけておく」

「宜しく」

ダルクが何か言いかけたけれど、私の顔を見て言つのをやめた。

後で聞いたことだけど、そのときの私の顔は、見ているだけで人を殺せそうぐらい怖かったらしい。

「へ？『私達の能力をこの城の全魔族に見せる』？いや、一つだけつてのは分かるんだけど……何かあったの？」

私の言葉に驚くキリヤに、ダルクに魔族を集めてもらった理由を話すと、納得の表情になり、

「なるほどね。帰ったら、部屋が荒らされていたと。で、アンタの愛する連中のポスターがビリビリになっていたって訳ね」

「てな訳で、試したい物やらのオンパレードだけど……良いよね？」

私の質問に、キリヤは、「いいわよ」と軽く返してくれた。

因みに、名目上はキリヤの勉強などの講座になったらしい。

あの子の話で、私が、『キリヤは人に教えるのが好き』と言ったら、
そう言う理由にしてくれたらしい。

後に、この会話も含めて第二部隊の皆さんから、『人間の皮を被った鬼』と言われてしまったんだけど……ま、いつか。

「えー、今回、王族の皆さんにまで集まってもらったのは、私達の信用を得るためです」

私は、城に居る全魔族が集められた闘技場で、足場を作ってそこに立ってそう言った。

本当は講堂的なところが良かったんだけど、集めるなら此処しかなかったらしい。

「いきなり護衛なんて重要な役職になっても、怪しいでしょう。なので、信用を得るために、私達の能力をお見せします」

と言って、私は腰に差していた剣を抜き（某ヨン様（笑）の能力である）、完全催眠の能力を発動させた。

「今のが、私達の能力です。皆さんもご理解していると思いますが、手の内を晒すのはマイナスにしかありません。それを軽々と見せたと
言う事は、皆さんの信用を得るため以外に無いでしょう」

言って、私はもう少し奥にあるキリヤが居るところまで走っていく。

前に出るのを交代するときに、

「しっかり全員見ていた？」

と聞かれたので、

「バッチリ。複眼で見っていたし」

と返すと、キリヤは頷いて前に出た。

そこから先は、キリヤ先生の授業（内容は政治に関すること）が続

き、その日はそれ以外に何事も無く終了となった。

「下準備は上々。後は教育をしっかりつてね。」

私は呟いて、割り当てられた自室へと戻っていく。

第六話 バカと教育とマジギレと（前編）（後書き）

短くてすいません……。

書いてる最中に、データが落ちて大惨事でした。

本当は、もっと長かったのですが、不慮の事故の為こんな感じに……。

今回ので見るのを止めてしまう方が出ないように祈ります。

それでは、次回の私と霧夜と転生世界をよろしくお願いします

第七話 バカと教育とマジギレと（後編）

『えー、私は謙虚で寛大ですが、どうしても許せない物が三つあります』

キリヤの教室が終わった後、私は、テレパスで城に居る全員の頭に聞こえるようにする。

『まず一つは、私に危害を加える奴。二つ目は、私の物を壊す奴』

ここまで言って、私は『悟りの毒』テリゲナシスで城の各所に居る全員の反応を見る。

……ピンゴッ

「エルザちゃん。これ、誰？」

私は頭の中に響かせていた声を一時中断し、横に居るエルザちゃんに尋ねる。

「えっと……これはドーフォ・アリク・ミゴリチですね。特別一部隊の教官です」

私が出した、反応があった男を出すと、エルザちゃんはそう答えてくれた。

「それって、強いのか？」

「はい。無駄に強いんです。悪魔ですし、一部隊と二部隊は特別強いので、教官も強いはずですよ」

……？何か引つかかるところがあるなあ……。

「ねえ、エルザちゃん？」

「はい？」

「二部隊の教官は誰がやっていたの？」

「そ、それは……」

私の問いに返答に詰まるエルザちゃん。

「……ん。なら良いや。後でアリアに聞いてみるよ」

言って、私はまた、城の連中の頭に声を響かせる。

『そして、三つ目は……私のものを傷つけておいて逃げる、悪魔出身の糞野郎だ！！』

私は、そう叫ぶと、次に城にあった、なぜか小学校の放送室を思い出させる部屋から、強制決定の決闘、日時、場所を指定して切った。

これまた後で聞いたことだけど……。

この時の私は、めちやくちや機嫌が良く見えたらしい。

「……まさか、あの意味の不明なキレ方した演説で、犯人が反応するとは思わなかったわ……」

キリヤが素で驚いた顔をしている。

……実際私も、あれで来るとは思っていなかったけど、まあ、来たんだから良いんだよ。うん。

で、私達が今どこにいるかと言いますと、天井が抜けた、闘技場２的なのところにいます。

決闘とか、勢いあまって考えちゃったけど、なぜか姫さんはノリノリで、

「よし、ボコボコにしてやれ。……ただし、あの黒い龍にはなるなよ？ いらん誤解を招く」

って言ってきた。

……まあ、あんなのここでやったら、下手するとこの国全員敵にまわすかもしれないし、使わないけども……。

黒じゃなくて、雷ならいいか。

「ククク。何人でもいいなど、あの国を潰したからっていい気になっっているのではないか？ いくら強かろうと、精鋭中の精鋭百人には

勝てまい」

「んじゃあ、キリヤ。ちゃんと呪文の動きに合わせてよ?」

「分かってるわよ。今回の私は魔物役なんだから、ちゃんと従うわ」

私達が生ゴミを無視して話していると、生ゴミは大変憤慨して炎の槍を飛ばしてきた。

「ククク……。この速度の槍は避けれまい?」

「だからさ。一応盾は決めようと思うんだけど、ほぼティオの方で良い?」

「それで良いわよ。って言うか、あれ、鬱陶しい」

私達が首を少し動かして炎の槍を避けると、生ゴミは精鋭中の精鋭（笑）で一斉に炎の槍を放ってきた。

「あー、本当に鬱陶しいね。無駄な行動をして……」

「そういえば、盾ってほばいらんじやないかしら？完全催眠あるし」

「なぜだ！なぜ当たらない！？」

どえらい生ゴミが焦ってた。

……ワロス。

「サクラ、キリヤ、流石に真面目にやってやね。なんか、哀れだ」

「「うーっす」

姫さんに怒られてしまったので、真面目にやることとする。

「よっ」

パチンツと指を鳴らして、完全催眠を解く。

私たちがさっきいた場所に現れたのは、精鋭（笑）の一人。ボロボ

口だ。

「なっ……！？」

「一体私がいつから」

「能力を使っていないと錯覚していた？」

私とキリヤが、黒いと評される笑みを浮かべてそう言う。

「大体、私は過負荷^{マイナス}だ。そんな奴が、真面目に安全性を証明すると思っただ？」

ニヤアとした、凄く不気味だったらしい笑みで、私は言う。

「じゃあ、女神様」

「ミコルオ・シン・ゼガルガ！」

金色の本を出現させ、私が呪文を唱えた瞬間、キリヤの体から、超巨大な機械の精が出現し、性懲りも無く飛ばしてきた炎の槍を消し

飛ばす。

「さてと、次は……キリヤ!」

「えっ……まさか……アレやる気なの?」

「うん。面白いから」

「私、後で貴女をぶっ飛ばすわ」

私はそれをきっぱり断った後、本のページをめくって、

「キリヤはVの体制で待機せよ」

「うっ……とんだ辱めだわ……」

「シン・チャーグル・イミストン!!」

キリヤの体からV型の極太光線が発射され、精鋭（笑）の十人ぐらいを吹っ飛ばした。

「思っただけど……これって、Vの体制をとる必要があるのかしら？」

「まあまあ。それじゃ、次はつと、バオウ・クロウ・デイスグルグ
！！」

「ふん。そんな爪などに用は無いわあ！！」

「今から使うアンタが言いますかい」

巨大な龍の腕でまた十人ぐらいを吹っ飛ばす。

「……ん？……またか（またね）……」

妙に軽い感触に、残っている精鋭（笑）の目は、殆どが虚ろだった。

良くある、操られている目だ。

「多いなあ。この世界」

「なんで操るゴミがこつもいるのかしらね」

私達は嘆息しつつ、二十人ほど吹っ飛ばされて焦り気味の生ゴミを見る。

「（くそつくそつくそつ！せっかく私に地位をくれないと言ったあの国を潰した上に、私の威厳まで脅かそうと言うのか！？大体、なぜ部屋に弱みを置いておかないのだ！ふざけやがって！こうなれば……）」

「あの『遺産』^{ロスト}を使って殺さなければ……ねえ」

「……なにに、遺産の効果は……良し、コイツ、殺しましょう」

「な、なんでそれを……！？」

「（ダメダメ、そんなシーンをエルザちゃんに見せたら、シスコンが怒っちゃうって！）」

シャキンッ。と音がして、私とキリヤの間を大剣が通過していった。

……危ないなあ。

「聞こえているぞ……」

聞こえてたんだ。そこに関してだけは耳が良いなあ。

「フン、ばれたなら仕方ない！こうなればその百人全ての命を吸い取って作った、火球を食らえ！！」

「あ、すいません。聞いてなかったんで、もう一度はじめから」

と私が言って、また最初から始めた物の、面倒くさくなってもうどうでもいい。と言ってあげた。

「お前達……流石に、酷いぞ……？」

姫さんに怒られてしまったので、飛んできた……なんかキモイ悪霊みたいなのが生えた火球に、バオウ・クロウ・デイスグルグをぶつける。

「……あら。これ、効かないのね」

「あー流石に、手詰まりかな？これ、意外に強いし」

爪がはじかれて、私達がちょっと冷や汗かきながら言っていると、シルバが、

「君達、前に言っていた正解を出す力があるんじゃないのかい？」

「「……………あ」」

つてな訳で、『アンサー・トーカー答えを出す者』の能力で、どうやったら消し飛ばせるかを出してみる。

「…………ええー。それでも、攻撃場所が要るのー？」

私は思いつきり不満そうな声を出して、本のページを開く。

「キリヤー。シン・クリア・セウノウスって使う気ある？」

「いやよ。あれ、気持ち悪いし」

「んじゃ、まあ、これでいきますか」

私達は大きく息を吸って、

「『^{ブラック・ルーム}黒い部屋は深くて、恐ろしいってね』全てを闇へと誘いな！」

「ディオボロス・ザ・ランダミート!!」

チートっぽい呪文のオンパレード第一弾。

さてと、次は――

「あ、あれ、なんだったかしら？まあいいわ……『ヴァルセーレの剣に吸い込みし、よろず魔物の魔力を放ち、万物を砂塵に変える千手剛剣とならん!!』」

「シン・ヴァルセレ・オズ・マール・ソルドン!!」

無数の剣を召喚する、第二弾

「シン・グライド・ガンズ・コファル&、シン・ドラグナー・ナグル!!」

「一斉射撃よりも、こっちのが強いものね」

巨大なライフル銃と周囲に浮遊する無数の小型のライフル銃を一箇所に集め、キリヤが構える。

第三弾の次はつと、

「ああ、これやったら、角度調整もいらなのね」

「オマケだけど、一番強いんじゃないかしら？ ホント、私達的能力って便利ね」

私とキリヤはそんな会話をして、

「シン・ジガディラス・ウル・ザケルガ&シン・バオウ・ラオ・ザケルガ!!」

キリヤの手から超巨大な雷神と、超巨大な雷の龍が出現する。

ZIGAAAAA

それは、『他者を操り、その命を糧に爆発的な魔力を使い、自分に還元する』と言う能力だ。

まあ、結局、生ゴミにありがちな能力なのだが、最後の火球にはちよっと焦った。

だってさ、効かなかったんだもん、しょうがないじゃない。

「さてと、言い残すことは？」

「ヒッ……来るなあ！！こっちに来るなあ！！」

キリヤがザッと踏み出すと、生ゴミはマジビビリしながら情けなく逃げた。

「……あれ、私が逃がすと思っているの？」

「貴女が物品に傷つけられると、キレる事を知らないから、しょうがないでしょう」

言って、銃から宝石を放ち、それにあわせてキリヤがその宝石の銃弾を殴り飛ばす。

一瞬後には、生ゴミは城の真裏まで吹っ飛んでいた。

「……ったく、ふざけやがって」

「サクラ、乙女がそんなこと言ってもんじゃないわよ」

「……圧倒的すぎます……」

「あれは……まあ、謀反を企てていたって噂もあるし、いい気味じやな」

「ある意味、あれが本気で決闘に乗ってこなくて良かったな……」

「私達の師があんな桁外れの強さなら、もう問題ないかもね」

みたいな事を皆が呟いて、私達は壊れた場所の修繕に向かったのだ。

第七話 バカと教育とマジギレと（後編）（後書き）

正直に言います。

意味が分からないんだあ——い！——！

ハイ。叫んでスッキリしました。

もう、駄文ですいません……。

くそっ……忙しいぜチクショー！！

もう少しマトモになる予定の次回、私と霧夜と転生世界を宜しくお願ひします。

第八話 私と霧夜と落ちこぼれのお姫様

「えー……姫さんに聞くのも面倒くさいので、レッツ感受性」

私は、感受性の異常アブノーマルを発動して、寝起きの姫さんの感情を探る。

「（……これは——姫さんの子供の頃かな？……キリヤが見たら、大はしゃぎしそうだけど……）」

そう思つて若干苦笑いしながら、精度を上げるために一方通行と心アクセラレータンタルアウトメ理掌握を発動する。

その二つを発動すると、最初は若干古ぼけた、白黒写真のようだったものがカラーで鮮明に見えてきた。

「……どうして……どうして、私は姉さまみたいな力が無いの？」

幼い姫さんは、遠くの方を指差して、自分の従者（つばい人）に尋ねる。

「いえいえ、姫様は魔法の力が無いのではなく、今はまだ眠っておられるだけなのです。ですから、心配など要りませんよ」

……若干、姫さんの勝気な性格と言っかなんと言っかな性格が形成された原点がわかったような気がした。

……戯言だけど。

って言うか、姫さんって魔法使えるんだ。

見たこと無いからわかんなかったけど……ダルクもあれ固有っぽい
のを使ってたんだからそりゃそうか。

と、場面が変わって、今度は成長した姫さんが。

「……………」

姫さんは、俯いて唇をかみ締めている。

年は……十歳ぐらいだろうか？

どうやら、周りの子供はあの系統魔法が使えるようになってるのに、姫さんだけ使えないらしい。

っと、どうやらここで終わりみたいだ。

ずいぶんと早いけど、トラウマだけを引き出すようにしてみたからかもしれない。

「……サクラ、なぜ私の部屋におる？」

……ん？

「だから、なぜ私の部屋におると聞いておる」

「あっはっは」

「いや、ごまかせておらぬからな！？」

なるほど、道理で早かったわけだ。

姫さんが起きたから、そこで強制終了と……。

「まあそんなことより、朝ごはんを持ってくるのでちょっと待って」

誤魔化して、私は姫さんの部屋から出る。

後に、姫が護衛部隊の特別隊長と付き合っているという、とある一部の人間に呪いをかけられる噂が流れるのだけれど……

それはまあ、他愛の無い戯言だろう。

「……………で？お尋ねしましょうか？」

頬杖をつきながら私は前の席に座るダルクに尋ねる。

「……いや……まあ、はい。二部隊の姫は魔力の才能が無いということ、強い者があまり集まらないんですよ」

冷や汗をダッラダラ流しながら、ダルクは答える。

「……で？」

私はダルクに続きを促す。

因みに、何故か今日キリヤは起きていないので、そろそろ昼だとい
うのに私一人で行動中だ。

「……えっと……それで、あの部隊は雑魚の集まりだーと言う、噂
が広まりまして……」

カタカタと小刻みに震えながら、ダルクは言う。

「……で、それよりも他の方に入った方がいいってなって、強い者
が二部隊に入らないって言う悪循環になる訳ね」

私がジト目でそう言うと、ダルクは頷いた。

「……あのさ、そんなに怯えなくても良いんじゃない？」

「お前が俺を脅して連れてきたからだろうが！」

私が言うと、ダルクにキレられた。

「大体、なんで普通に呼ぶじゃなくて、手足に銃弾打ち込んで呼ぶんだよ。すぐに治ったが、どう考えてもビビるだろ」

ムスツと、ダルクは不機嫌そうな顔で返す。

「どっかの誰かさんみたいに再起不能にする訳じゃないんだからいいじゃん」

「そのどっかの誰かさんが気になるところだが……まあ良い。お前をキレさせて死ぬのも嫌だからな」

未だにムスツとした顔で、ダルクは言う。

「で、どうすんだ？何かすんだろ？」

ダルクが、仏頂面でそう言う。

「うーん……どうしようかな……」

私は考える素振りをダルクに見せる。

「そんな下手な芝居はいいから、どうするつもりなんだ？」

ジト目でダルクは言うて来る。

……下手って……

「……まあ良いや。んで、どうするかだけど——」

次いで私が発した言葉に、ダルクは目を丸くした。

「……で、ちょっとお願いしたいんだけどさ……」

私が、例のメンバーのシルバ、エルザちゃん、ダルク、アル君、エミリーちゃんを集めて、お願いの旨を伝えたと、皆は目を輝かせてノリ

ノリで行動を始めてくれた。

……さてと、私も呼びに行かないと……

「えーっと、螺子でも刺せば起きるかな？」

ドスドスと、なぜか未だに眠っているキリヤの体に螺子を刺しているが、反応無し。

「……とりあえず、これは治してっ」と

大嘘憑き（オールフィクション）で螺子の傷を『なかったこと』にした後、今度はベクトル変換で覚醒させようとしてみる。

「……反応無し。んなら——」

と言いかけた所で、パチツとキリヤは目を開けた。

「……まったく、何よ。もう朝なの？」

「いや、今は夕方だけだね。それよりも、そろそろ準備できた頃だから行くよ」

「……？……どこへ？」

キリヤは不思議そうな顔をして聞いてくる。

「食堂へ」

これから始まる事に期待を膨らませつつ、私はキリヤを引きずって部屋を出た。

「……サクラ、どこへ行くのだ？」

「食堂。ちょっと皆、大事な話があるんだって。今後のことについて」

私が言うと、姫さんは顔を曇らせた。

ま、大体何を想像しているかは分かるから、何にもコメントはしないけども。

「ああ、着きましたよ、姫さん」

キツと食堂の前で止まり、ガチャッと扉を開ける。

『おめでとつございます!!』

入った途端、さっき私が渡したクラッカーが飛んでくる。

……使い方が違う。

デリゲナシネーマメント
悟りの毒の麗血開花でクラッカーを引いた後、姫さんの反応を見ようと振り返る。

「……み、皆。何だ、これは……?」

「べっつい、記念日ですよ記念日。二部隊結成のねエ」

キリヤがだるそうな感じで言う。

今回は自分の出番が少なかったからって、ふてくされない。

「全員、貴方に忠誠を誓うみたいですよ、姫さん」

私が言うと、姫さんは瞳を潤ませ、

「……み、皆……」

と呟いた。

「さーて、今日は記念日なんだから、朝まで騒ぐわーっ!」

周りの空気に耐え切れなくなったのか、キリヤがそう叫んだ。

……アンタは何にもしてないでしょ。

私と皆とシュミレート（前編）

「電腦世界？……またそんなロックマンみたいな事を……」

『いやね、今回はちょっとしたバグなのよ。トマス＝プラチナバグって言う』

「なんでまたそんな奴が……。で、それを殺してこいと？」

『直球ね。まあ、そんなところよ。ついでに、パレルワールドね。……さつきもう片方の組に連絡取ったから、疲れるわー』

「え、誰が来るの？」

『ちよーっと他の世界のヤツをね。期待していてもいいわよ』

「ふーん。まあいいや。どうせ転生者だろうし」

『察しがいいわね。まあ、頑張って』

と言う声と共に、床が抜ける。

ついでに言えば、寝ていたキリヤも一緒に。

「……んお？桜かよ？」

「ああ、風祈だったんだ」

私は、学園都市らしき場所の、『アイテム』が集まるファミレスで、席に座っていた。

下には、睡眠中のキリヤが居る。

「まあ、今は私と——」

そこで下で寝ているキリヤを引っ張り出して、

「霧夜はサクラとキリヤで通ってるから、そっちでよろしく」

「……ふーん。まあ良いんだが……コイツ起こすの手伝ってくれねえ？」

風祈は、横で、こっちは座席で寝ている、薫ちゃんと風香ちゃんの方を指差していた。

「あー。この二人、寝起き最悪だもんね」

「そうなんだよなあ。コイツら、最早低血圧と呼べないぐらいなんだよ」

風祈が苦笑いで言う。

因みに、私と風祈が知り合いなのは、前（転生前）に図書館であったことがあるからだ。

……え？フラグは……まあ、立ってたんじゃないのかな？忘れたけど。

「……ったく」

といって首を掻いた風祈が、カチツと言う音と共に倒れた。

「…………え？」

思わず、私はそう言う声を出してしまう。

と、つけていた振り子に通信が。

『ああ、そうそう。アンタたちは、ちょーつと私が他の世界でヤバイのを倒すのに苦労するから、いろいろとおかしくなるはずよ』

そう言う、神の声。

『具体的に言えば、一方通行のチョーカーと同じ原理ね。アンタ達のチートは、五分限定よ』

うわぁ。そんなことがあるのかい。

そう思いながら、私は神に尋ねる。

「あのさ、ここに居る三人が眠っているのって……」

『ああ、ごめん。それ、弊害だね。なあに、安心して。そろそろ13巻の辺りだから。一方通行君やら、上条当麻君やら、前方のヴェントやらが出てくるわ』

「敵が増えとる。敵が」

『それと、バグの二つ目、『前方のヴェントの天罰術式』だから。ファイト!』

「さすがに一回シバいた方がいい気がするんだけど……」

呆れ顔で私が言うと、神は、

『まあ、ファイト!!』

と返して通信を切りおった。

……まあ、別にいいんだけど。

「おい。風祈」

風祈の首にある、今更ながら気付いたチョーカーのスイッチをスライドさせて、言語使用モードにする。

「……むう。……今更ながらに気づいたが、大方、このチョーカーが着いてるってことは一通さんと同じなんだろう？」

「大正解だよ。良く分かったね」

「だってよ、お前、『アナタの時間は黄色で緑のくれますか』って、意味の不明な文章聞かされたら一通さんと同じと考えるだろう」

言いながら風祈は能力使用モードにして、

「五分つてどこか？まあ、とりあえずコイツらが無事が確認しとくか」

風祈はそういつてキリヤ、薫ちゃん、風香ちゃんの頭に手を置いて脳波を調べ始めた。

「……問題はねえな。ただ、時系列的に木原クンが敵ってことは『ハウンドドック 獵犬部隊』が敵ってことだな」

「……それと――」

渋い顔で言っていた風祈にヴェントのことを伝えようとして、高校生の声が響く。

『はまづらああああ！おっせーんだよ teme エー！ドリンクバーにどれだけ時間かけてやがんだ！』

「……浜面？」

私と風祈は顔を見合わせる。

「おい。今のつて……」

「和解した後の麦のんよね……。いろいろ滅茶苦茶だわ」

さすがパラレルワールド。と二人で言いながら、その席へ向かう。

「あゝ。御一緒してもよろしいでしょうか？」

営業スマイルを作りながら尋ねると、

「ああん!？」

と妻のんに睨まれた。

「って、お前は――」

「うん。分かったからちよつとそつちのことは言わないでくれ。大体分かったが、大体この世界で言うのは危険すぎる」

風祈が頭を抑えながら言っていた。

……何かあるんだろうか？もう一人の風祈が禁書世界にいるとか。

「ああ、それで、いいのか？」

「……まあ良いけど」

「私も超良いです」

人の良さそうな二人で安心した。

「大体絹旗と大体フレンダもよろしくな。俺は——霧沢風祈だ。ンで、コイツはサクラ。向こうにも連れが居るが、大体それは後でいいだろ？」

「結局、宜しくってワケよ……って、いつもなら言うんだけど……。その口調……」

「ん？これはお前の妹の口調だぜ？使ったことに深い意味はねエ」

「……さっきは超聞き間違いかと思いましたが……あなた、超もしかして『暗闇の五月計画』の——」

絹旗が、敵意を出してこっちを睨んでくる。

……絶対わざとだ。

「いえ、別に『黑夜』とかも、『一方通行の思考パターン』の一部を植えた『ナントナイン』も知りませんよオ。ただの一介の高校生でエス」

「……超ふざけてンですか？だったら、超容赦なくぶっ潰しますよ」

本格的に敵意を出し始めちゃった。

……日ごろの鬱憤なのかな？

「……さて、まあこんな冗談はさておいて……」

と、風祈がそこまで言いかけて止めて、チョーカーのスイッチを能力使用モードにする。

「スマン。ちょっと待っててくれ」

言って、転移していった。

風祈を待っている間に、ふと目の前にある窓の外を見ると、

『……ここで待ってる』

といって隣のドラックストアに入っていく一方君が。

「なーる。そう言うわけね」

酷いとは思いつつも、黙って傍観。

すると、座らされていた打ち止めは猟犬部隊に攫われて行った。

「っと、スマンな。携帯をとって来た」

「…………どこに？」

攫われて行った瞬間に戻ってきた風祈に、尋ねる。

「ちょっと携帯をなくしてもどうだっていいだろうやつの家からパ
クツてきた。＜パーティ＞の準備ってやつだ」

風祈はそいつって、携帯のメモリを見て何処かへとかけ始めた。

「あれ？そついえば、滝壺は…………」

「ああ、滝壺は浜面と一緒に――」

麦のんがそこまで言いかけた所でガツシャアンツツ！！と音が鳴り響き、さっきまで私達が居た席に猟犬部隊が集まり始めた。

「ああん？」

おっと、私としたことが。が、麦のんも同じだったようで、

「はまづらアアアア！！ぜってえ滝壺を守れ！！」

『わ、分かってるよ！！ただ、援護射撃とか無くていいからな！俺達死ねから！！』

麦のんの言葉に叫び返してきた浜面だけど、やばそうだったので援護射撃。

「レールガンってね」

ピンツとスカートのポケットから取り出したコインをはじいて、キリヤたちの近くに居る猟犬部隊と浜面たちを囲んでいる猟犬部隊を

吹っ飛ばす。

と、真横から原子崩し（メルトダウン）が飛び、吹っ飛んだ猟犬部隊が全員消し飛んだ。

ヒャッハウ！！

「っと、連絡終わりだ。助っ人が来るぜ」

原作通りに進むことは無いな。と風祈は言って、その後、

「……ただ、木原クンは殺す。一方通行と共同だろうと、ぶっ殺す」

「それは同意。……ただ――」

ここに居るのは、麦のん以外は戦わせない方が良さだろうから……

「絹旗、フレンダ。浜面と一緒にいったん逃げていて。この指定した場所を、解体やら爆弾を仕掛けといて欲しいんだ」

私は、そういつて無理やり二人を浜面が居る方へと行かす。

「はまづらあ！！その二人の盾ぐらいにはなれよ！」

麦のんが言つて、浜面たちは走っていった。

……事情説明はあの二人がやってくれるだろう。

「んじゃ、行くか」

バリッ！と窓をテーブルで壊して、一方くんが現れる店先に行く。

と、丁度一方君が来て、曲がり角を曲がったところで、

「「「「あアン？」「」「」

突っ込んできた車を睨んで、反射&原子崩し。生かさなければども。

「やつ。一方君。木原クンをブ・チ・コ・ロ・シ・にしに行くから、ついて来てくれない？」

「ああ。事情は大体そのメルヘンから聞いている。打ち止めを助けるのも重要だからな」

と、一方君が親指で指した後ろには、イケメンスマイルのていくんが居た。

なんとなく、球磨川さんが言ってたあの言葉をていくんに置き換えてみたくなって、

「……『お前なんだか、帝凍庫になっていそうな顔だよな（笑）』」

私が言うと、ていくんは若干笑みを引き變らせていた。

……やっぱり、この程度じゃキレないか。

蝶ヶ崎君が変つてことが良く分かった。

「……まあ、なんにせよ、これからていくんには動いてもらいたい場所がある」

風祈はピラッと紙を取り出して、ていくんに突きつける。

「そこに書いてある場所に行ってくれ。居る奴らが力になってくれるはずだ」

そういつて、ていとくんを何処かへ行かせる。

「……さて、わざわざ『原作』に沿う必要も無いだろうし」

といって、一方君に木原神拳のことを教える。

「……だから、木原クンを見つけたら迷わず打ち止めを吹っ飛ばしてくれ。今のお前じゃ相性が悪すぎる」

風祈が言つと、一方君は若干渋い顔をしながらも了承するよつに頷いた。

「……さて、なら、行こうか」

私が言つて、私達は歩き出す。

……因みに、木原クン達がなんでキリヤたちを攫ったのかは分から

ないけれど、

「薫と風香にはいつも発信機つけてるからな。居場所には楽に分かる」

らしい。……さすがシスコン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3221p/>

私と霧夜と転生世界

2011年10月7日23時33分発行